

## 巻頭言 ウイスキーを飲もうよ

西川 伸一

ゼミコンパは楽しい。最近はず、飲み放題の居酒屋か飲み食べ放題の中華料理店で開かれる。この数年の私の飲み方は決まっただけで、最初にビールで「ベースロード」をつくったあと、ウイスキーに切り替える。シングルのオン・ザ・ロックとそれとは別にチェイサー（単なるお水です）を頼む。本来、チェイサーはストレートで楽しむときの「追い水」なので、オン・ザ・ロックにチェイサーは普通つかない。もし、ウイスキーバーで頼んだら、「ださいやつ」とバーテンダーに冷笑されるだろう。

トワイヌアツプといって、氷を入れずにウイスキーと常温の水を一对一に混ぜて飲むのが、ウイスキーの味と香りにうるさい玄人の飲み方だという。しかし、私には氷がないときりりとした感じがなくて物足りない。ハーフロックはトワイヌアツプを作る前にグラスに氷を入れた飲み方である。これだとやや薄く感じて



インパクトが弱い。自宅で飲むときは、オン・ザ・ロックスに水道水を少し注ぐ。冷たさといい濃さ加減といいこれがちょうどいい。そして、氷で光が乱反射した中に浮かび上がるウイスキーの琥珀色が、ちよつと怪しく魅惑的なのだ。

居酒屋でこんなわがままはいえないので、オン・ザ・ロックスとチェイサーを頼んで、その水をウイスキーグラスに少し足すことにしている。

私の学生の頃は飲み放題の居酒屋はあまりなかった。ウイスキーはグラスかボトルで頼むことになる。ボトルで頼むとボトルキープができた。ボトルキープのカードが発行されて、次に来たとき、カードを提示すれば前回飲み残したボトルを出してもらえる。はじめてボトルキープのカードをもったときのうれしかったこと。まったくのうろ覚えだが、サントリーのホワイトという薬臭い安ウイスキーが、二五〇〇円くらいでボトルキープできたのではないか。粹がって「おれのボトルがあるから飲みにいこうぜ」と友だちを誘ったのは、まさに青春ならでの一コマである。

一方、高級ウイスキーの代名詞はオールドパーだった。田中角栄が愛飲していたことは有名である。私の指導教授もこれがお気に入り、ゼミ合宿には一本持

参するのが習わしだった。院生から助手になった頃、指導教授のゼミ合宿に同行した。コンパで先生はやおらオールドパーを差し出し、「オールドパーは一五二歳まで生きたんだ。ラベルにそう書いてある」とおっしゃった。ウイスキーのラベルなど気にも留めていなかった私は、先生の犀利さを尊敬した。確かに、ラベルをよくみるとパーの肖像画に加えて「一四八三―一六三五」と生没年が書いてある。ただ、私としてはオールドパーよりジョニ黒のほうが好きなんだけどね。

クラシック・ギタリストの村治佳織は実はウイスキー好きで、こう語っている。「これからヨーロッパに数か月長期滞在する。そういう長時間のフライトの時などは、飲みますね。(略) ウイスキーの香りも〔機内だと〕際立つ。なんだか涙腺も緩むみたいで、映画観てもすぐほろりときちやう。「寅さん」とか観ててぼろぼろ泣いたりして。」矢島(二〇一三・二〇)

ウイスキーと「寅さん」。最高にカッチョイイ！ 次に国際線に乗るときがあったら、迷わずウイスキーをオーダーしよう。

嶋谷・輿水(二〇一三)には、ウイスキーの飲み方が八通り紹介されている。この二人はサントリーでウイスキーづくりの心血を注いだプロ中のプロである。



それぞれの飲み方に「心地よい喉越し」（ストレート）、「氷とグラスが奏でる軽やかな音楽」（オン・ザ・ロックス）、「スタイリッシュな飲み方」（ハーフロック）、「ウイスキー本来の味わい・コクが断然際立つ」（ハイボール）などとニクイ解説をつけている。この二人だからこそ説得力がある。なんともおしゃれで、わくわくしてくる。

さあ、ウイスキーを飲もうよ。

二〇一四年三月七日

#### 引用・参考文献

嶋谷幸雄・輿水精一（二〇一三）『日本ウイスキー世界一への道』集英社新書。  
矢島裕紀彦（二〇一三）『ウイスキー粹人列伝』文春新書。